

The 25th Annual Meeting of Pediatric Rheumatology Association of Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/44224

『学会開催報告』

第25回日本小児リウマチ学会
総会学術集会The 25th Annual Meeting of Pediatric
Rheumatology Association of Japan金沢大学医薬保健研究域医学系小児科
谷内江昭宏

平成27年10月9日(金)～11日(日)に金沢歌劇座において、第25回日本小児リウマチ学会総会学術集会が開催されました。

本学術集会は北陸の地では初めての開催になりました。今年は本学会設立25周年の節目に当たり、テーマとして、「小児リウマチ学会の過去・現在・未来」を掲げました。

特別講演では小児リウマチ学の世界的な権威であるGenova大学のAlberto Martini教授をお招きし、Biological therapies in juvenile idiopathic arthritisと題し、劇的な効果をあげている生物学的製剤の可能性についてご講演を賜りました。

教育講演1では、本学のご出身である福井大学皮膚科の長谷川稔教授に、膠原病－皮膚科医はこのように診断する－と題し、膠原病の皮膚病変の診かたに関するご講演を賜りました。また教育講演2では、リウマチ膠原病内科の川野充弘臨床教授に、IgG4関連疾患の多彩な臨床－リウマチ性疾患との鑑別－と題し、新しい疾患概念であるIgG4関連疾患に関するご講演を賜りました。

シンポジウム1では、免疫異常症としてリウマチ性疾患を考えるとというコンセプトで、そのモデルとなる様々な免疫不全症から自己免疫、自己炎症の仕組みを考えました。シンポジウム2では、自己炎症性疾患の診断、治療の現状と問題点を認識し、その解決に向けた病態解明の試みに関してのご発表がありました。シンポジウム3では生物学的製剤による治療が行われるようになり、より高度なレベルの寛解を目指して、既存の指標を超えた病勢評価の必要性に関する議論が行われました。

またテーマに即した特別企画として、本学会の歴史を振り返る特別企画展示や本学会運営委員長の日本医科大学の伊藤保彦教授より日本小児リウマチ学会の歩みを紹介する講演、ベテランから若手に貴重な経験を伝えた4人の先生方の伝承失敗学のご講演が行われました。

その他、不明熱の的確な診断に向けたPET検査の有用性とそのピットホール、慢性疼痛性疾患を神経炎症としてとらえるワークショップ、若手優秀演題奨励賞口演、徹底的に討論いただくポスター発表による一般演題など、学術集会期間中非常に活発な討論を行うことができました。

近年、遺伝子解析・病態解析の進歩、生物学的製剤や関

節エコー等の新しい治療・診断技術の発展により、小児リウマチ性疾患に対する疾患理解や診療は大きく変化してきています。本学会では、25年間の歴史の中から生まれた多くの成果を振り返りながら、小児リウマチ診療の変貌について考え、今後の更なる発展を期す活発な発表の場となったと思います。

最後に、本学術集会に参加いただきました会員の方々、本学術集会を開催するにあたりご協力いただきました企業の方々、御後援いただきました石川県、金沢市、そして金沢大学十全医学会の皆様へ深く御礼申し上げます。さらに今回の学会の成功は、学会の企画、運営に最初から最後まで全力を注いで下さった医局スタッフの努力があつてのこそであったことを申し添えさせて頂き、あらためて感謝の意を表します。

